慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J・ケネディ著『二十世紀アジアのナショナリズム』
Sub Title	J. Kennedy, Asian nationalism in the twentieth century
Author	松本, 三郎(Matsumoto, Saburō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.5 (1969. 5) ,p.119- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690515-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

J. Kennedy.

Asian Nationalism in the Twentieth Century

Macmillan: London. 1968, x+244 pp

J・ケネディ著

『二十世紀アジアのナショナリズム』

一

著者は、イギリスのメードリー教育大学 (Madeley College of Education, Staffordshire) の主任講師で、史学科のヘッドでもある。東南アジア史を専門とし、マラヤ史の著書があるが、大家の多いイギリスの歴史学界の中では比較的新人の部類に入る人である。本書は、二〇世紀に開花したアジアのナショナリズムについて、きわめて簡明且つ要領よくその概史をのべ、その特性と問題点を指摘したものであるが、後篇につけられた約一〇〇ページのアジア・ナショナリズムに関係の深い多数の人物の論文の抜萃とともに、アジア・ナショナリズムの概括を知るには非常に便利である。本書の構成は次の通りである。

Part I: Survey

1 Patterns of Nationalism

2 The Course of Asian Nationalism: Japan, China, the Indian Subcontinent

3 The Course of Asian Nationalism: South-East Asia, Western Asia

4 The Springs of Asian Nationalism

5 Some Problems of Asian Nationalism

Part II: Source Readings

Asia in General

Japan

China

The Indian Subcontinent

South-East Asia

Western Asia

二

第一章「ナショナリズムの諸形態」は、西欧におけるナショナリズムと二〇世紀初頭のアジアのナショナリズムに分けて説明されている。前者において著者は、ナショナリズムを、「ネーション・ステートに向けられる各個人の忠誠心を中心にした概念」であり、「主権国家内に統合されることを期待する民衆の願望」であると定義す

る。自己の住む土地や地方的慣習に対する愛着は、ほとんど人類の歴史の発生とともに存在してきたが、われわれの知るナショナリズムの概念は、正に近代民族国家の産物にほかならない。十六、七世紀にイギリスをはじめとする西欧世界に現われたナショナリズムは、とくに十八世紀後半に入るとフランス、アメリカに開花し、十九世紀になると次々と他のヨーロッパ諸国にも展開した。しかしながら、本来自由と革新を精神的基盤として発展してきた西欧ナショナリズムとその担い手達は、一度権力の座につくと往々にして、より自由でより革新的な運動を抑圧し、権力政治的葛藤を繰返した。

かくして、ナポレオン戦争後約一世紀間のヨーロッパの歴史は、先進民族国家による後進ナショナリズム運動の抑圧を特色とした時代であり、それは、ナショナリズムが民衆（フォーク）の段階から国民国家（ネーション・ステート）の段階を経て、膨脹主義の第三段階に入り始めたことを示すものであつた。ヨーロッパにおける後進諸民族の政治的自決権を求めるナショナリズムがようやく公認されたのは、第一次大戦後のことであつた。

さてアジアにおけるナショナリズムは、西欧におくれてスタートした。もちろん、アジアのナショナリズムといえども二〇世紀になつてはじめて始まつたものではなく、一九世紀後半にはすでに多くのアジア諸地域においてその萌芽をみることができるが、それにもかかわらずアジアのナショナリズムの高揚を二〇世紀の現象とよぶのには多くの理由がある。

ヨーロッパにおけると同様アジアのナショナリズムも、まず少数の主として都市に居住する知識人によつて始められた。このアジアのナショナリズムは、一般には西欧に対する反逆として扱われている。確かにアジアのナショナリズムが、西欧の支配から逃れることを目的として展開されてきたことは否定しがたいが、そのもつ今一つの特性すなわち、現代社会において、民族としての後進性を意識したアジア人が、新らしい民族精神を求めて摸索する、いわばアジアのルネッサンス期の産物として追求されてきたことを決して看過してはならない。従つて、西欧支配以前への復帰を主張するアジアの伝統復帰型ナショナリズムも、その本質においては、決して伝統固執型ではなく、近代化への指向を多分に含んだものであつた。

このようなアジアにおける少数の知識人による民族意識の高揚が、やがて大規模な民族運動に発展する転機を、われわれは二〇世紀初頭に求めることができる。古い政治的、社会的秩序は、内部的、外部的圧力によつて崩壊への歩みをはじめていた。富国強兵の道を歩む日本、三世紀にわたる満州王朝の末期にある中国、会議派、回教徒連盟という二大政党が創設されて自治要求をはじめていたインド、また日露戦争における日本の勝利、孫文の三民主義等に大きく影響され、民族運動の端緒についた東南アジア諸地域、そのいずれをみても、世紀の交代を期に新らしいアジアが現われつつあることは明らかであつた。しかしその成果を刈取るためには、二つの世界大戦の結果をまたねばならなかつたのである。

第二章「アジア・ナショナリズムの歴史――日本、中国、インド半大陸」および第三章「アジア・ナショナリズムの歴史――東南ア

ジアと西アジア」は、その名のごとく二〇世紀アジアにおけるナショナリズムの潮流のあとを簡明に辿つたものであるが、ここでは紹介を省略する。

第四章「アジア・ナショナリズムの源泉」において、著者は二〇世紀に入つて開花したアジアのナショナリズムを構成する諸要因を検討する。アジアにおける近代ナショナリズムは、多くの水源をもつ川のごときものである。その流れの速さ、方向は、国により時により異なるが、その水源には共通した多くの特性がある。

先ず、「歴史意識（sense of history）」が芽生え、これがアジアにおける民族運動の推進力の一つとなつた。日本のナショナリズムが、その島国という地理上の特性と、神代にまでさかのぼる長い天皇統治を背景とした政治史の上に展開されたことは周知の通りであるし、また中国の民族主義者が、かつては野蛮国と考えた西欧列強に屈服を余儀なくされる清朝帝国をみて、その偉大な過去を追想し、それへの復帰を提唱したのは当然であつた。

インド民族主義者内部のインド・ルネッサンス意識は、より複雑であつた。ヒンヅー教徒の間では、マラータ王朝時代、そして回教徒の間ではムガール王朝時代と、それぞれイギリス統治に先立つて繁栄した過去の盛時への追憶が、インド民族主義運動に刺戟を与えたからである。このような過去の偉大な時代に対する追憶は、一九世紀末までにその大部分が西欧諸国の支配下に入つていた東南アジアや西アジア諸国の民族主義者の間でも強烈であつた。

著者が、アジア・ナショナリズムの第二の特徴として挙げているのは、「排外主義」である。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて最高潮に達した西欧列強による領土的侵略、自国権益の侵害等に対する排外運動が、この時期に高まつたのは当然であつたが、さらに、すでに植民地化されていた地域では、インドに典型的にみられるように欧米植民政府による欧化主義、かれらの伝統的生活様式への干渉が、強い排外主義を生む原因となつていた。

また、西欧帝国主義列強による植民地の経済的搾取という主張も、アジアの民族主義者の間に排外主義を定着せしめるのにもつとも有力で魅力的な論拠となつていた。現在のアジアの貧困が、ヨーロッパ諸国の手によるアジアの富の巨大な流出と結びつけて考えられるとき、それは容易に大衆にとつても理解できるものであつたために、民族運動の巨大なエネルギーとなりえたのである。

しかしながら、アジアにおける排外主義が、単に白人種にむけられたのみでないことも想起すべきである。第一次大戦期以後の中国における排外主義の主たる対象は日本人であつたし、東南アジア諸国における華商あるいは印商に対する敵意をはじめ、新興アジア諸国民相互間にある排外主義も決して少なくはないのである。さらに、独立後間もないアジア諸国の多くは、その国内に多数の少数民族をかかえており、かれらの支配民族に対する態度にすら排外主義はみられるのである。

第三に、アジアのナショナリズムの興隆に果した「教育の役割」も重要である。まず植民地における西欧流の教育が、アメリカ、フランス、オランダ、イギリス等欧米諸国におけるナショナリズムの

歴史を教え、愛国心、自由、平等、民主主義についてアジアの知識人を啓蒙するところ極めて大であつた。二〇世紀アジア・ナショナリズムの担い手の大部分が、多かれ少なかれこれら西欧流教育を受けていたことはそれを物語つている。このような西欧流教育に刺戟されて、伝統的教育部門においても、アジア・ルネッサンス期を担う愛国心に燃えた青少年の教育に力を注ぎ、インドネシアの有名なブディ・ウトモのごとく、民族運動がまず教育の振興という形で展開された例も少なくなかつた。日本のように植民地化されなかつたところでも、ナショナリズムと教育の充実という両者の間は、富国という共通の目的でつながつていたのである。

第四に、急激に起つたアジア諸国における社会的、経済的変動とナショナリズムとの関連である。欧米諸国の植民統治下にある地域の都市部では、下級政府官吏、商人などからなる小規模な、しかし比較的影響力のある中流階級が誕生し、やがて植民地行政、経済活動の拡大とともに、その勢力も次第に増大していつた。アジア・ナショナリズムの担い手となり指導者となつたのは、もちろん国により程度は異なるにしても、この中流階級知識人であつたといえる。一方植民地における経済活動の増大は、鉱業、大農園における労働者数の急激な増大をもたらし、結局はかれらもやがて展開される民族運動において重要な役割を演ずることになつた。都市中心の「中流階級ナショナリズム」の傾向の強かつた東南アジア諸国一般のナショナリズムと異なつて、毛沢東の中国では、農民大衆がナショナリズムの重要な担い手となつた点に特色を有した。

さて、アジア・ナショナリズムの「イデオロギー的基盤」の大部分が、西欧から導入されたものであつたことは明らかである。ことにその最初の段階においては、ミル、ルソー、ロックというような思想家の自由民主主義とマルクス主義が、アジアのナショナリズムに影響を与えた二大政治思潮であつたといえよう。

新しい国造りのために社会を改革し、社会主義を実現し、新らしい思想を確立することを望むアジアの民族主義者の間で、一種の世俗的宗教の役割を果し、また計画的な経済発展のためにも有利に思われる。マルキシズムが魅力ある存在となつたことは容易に推察できる。ネール、スカルノ、オン・サン、孫文等多くのアジアの指導者達は、多かれ少なかれマルキシズムの影響を受けていた。一九二〇年代には、アジア各地で共産党が組織されたが、反帝国主義とか新らしい社会経済秩序の創設といつた基本的目標では、民族主義者と共産主義者の間には差がなく、後者はしばしばアジア民族運動の中で重要な役割を果してきたのである。

最後に、アジアのナショナリズムを推進し、統合していくために果した「宗教」の役割を挙げねばならない。本来国境を越えた同邦愛によつて結ばれていた回教徒も、近代国家の誕生とともに、オットマン・トルコの絆から逃れようとするアラブ・ナショナリズムの抬頭や、ヒンヅー教徒の支配から分離独立しようとするパキスタン回教徒のナショナリズム等にうかがえるように、強い民族統合の絆としての役割を果してきた。

またビルマに代表される多くの東南アジア諸国においては、西欧

植民者による支配以後衰退の一途を辿つていた仏教の振興を、反植民地ナショナリズムの有力な凝集要素とすべく努力が払われた。ビルマ、セイロン、カンボジアの三国は、この仏教復興運動とマルキシズムの二本の柱の上に、かれらの近代ナショナリズムを展開したといつてもよい。

キリスト教は、それがしばしば西欧的であり植民者的属性であると考えられたため、アジアにおいては敵意をもつて眺められてきた。しかし、レバノンやフィリピンにみられるようにキリスト教が支配的で、ナショナリズムの担い手となつた国もあるし、旧仏領植民地のカトリック教徒や中国の孫文のようにキリスト教徒が重要な民族主義者であつた例も多い。

日本のナショナリズムの展開に際して、神道の果した役割はきわめて大きかつた。すでに明治維新期に神道は国教化され、一万五千の神官と十万もの大小神社が確立されていた。天皇を神格化し、日本を神国化するに貢献していたこの神道は、やがて日本の軍国主義、ウルトラ・ナンョナリズムを促進するのに重要な役割を果したのであつた。

このように多くのアジアの民族主義者が、特定のイデオロギー、あるいは宗教にかかわりをもつていたことは明らかであり、一度世俗主義を確立したところでも、その地位はたえず脅かされてきたのである。

第五章「アジア・ナショナリズムの諸問題」では、ナショナリズムの第二段階に入つたアジアの新興諸国が直面している国内における多数の分裂要因や変動しつつある国際情勢に対応するに際して抱えている諸問題を指摘する。すなわち中国からトルコに至る全アジアのほとんどすべての国が、国家的統合に逆行する地域主義、少数民族問題、言語問題、宗教問題など諸種の分裂要因に悩んでいるし、また隣国との間には、旧植民国の遺産としてのイレデンティズムからくる国境問題も少なくない。

さてこのように、アジアの新興諸国の前進には非常に多くの困難が横たわつているが、今新たにこれに立向おうとしているのは、独立運動を主たる任務としたナショナリズムの第一期に活躍した人ではない。古い指導者達の多くは舞台裏に去り、新らしく登場したナショナリズムの指導者達は、その思考において前者よりも柔軟で教条主義的ではない。また政治的であるよりはより経済的分野に力点をおこうとしている。かつてスカルノが、「西欧においては民族国家の概念は時代遅れだとの考えがあるが、ナショナリズムが非常な重要性を持つているアジアにおいては、このような考え方はとても受入れられない」と述べたように、アジアのナショナリズムは現在もいぜんとして重要な存在価値をもつものである。変つたのは、その担い手の性格であり、そしてその目的が、「破壊」から「建設」に移行したことにある。

三

二〇世紀アジアの歴史を推進したエネルギーが、そのナショナリズムの勃興にあつたことは明らかである。第二次大戦後のアジア研

究が、先ずこのアジア・ナショナリズムの歴史と性格に関する研究から始まつたのは当然であり、今日までにその文献もかなり豊富に発表されてきている。古典的価値をもつ《Hans Kohn, Geschichte der Nationalen Bewegung in Orient, Berlin, 1928.》は別格として、戦後出版され、その多くが邦訳され広く読まれてきた《Owen Lattimore, The Situation in Asia, Boston, 1949.》《W. M. Ball, Nationalism and Communism in East Asia, Melbourne, 1952.》《Jan Romein, De Eeuw Van Azie, Leiden, 1956.》《Tibor Mende, La révolte de l'Asie, Paris, 1951.》《Philip W. Thayer, ed., Nationalism and Progress in Free Asia, Baltimore, 1956.》《Rupert Emerson, From Empire to Nation: The Rise to Self-Assertion of Asian and African Peoples, Cambridge, 1960.》などはいずれも注目するにたる好著であつたし、またわが国においても、世界経済研究所編「アジアの民族運動」（一九四八）にはじまり、蠟山芳郎「アジアにおける民族解放運動」（一九四九）、平野義太郎「アジアの民族解放」（一九五四）、中東調査会編「アジア・アフリカ民族運動の実態」（一九六一年）、板垣与一「アジアの民族主義と経済発展」（一九六二）などをはじめ多くの良書が出ている。

このように質量ともに豊富なアジア・ナショナリズムに関する研究と比較するとき、本書の分析そのものはやや簡潔にすぎ多くを期待することはできないかも知れない。ただ本書が、二〇世紀アジアのナショナリズムを、単なる西欧に対する反抗運動あるいは反植民地主義運動としてのみとらえず、その底流に力強く存在するアジア・ルネッサンスへの期待という積極的観点からとらえているところには注目すべきであろう。本書は、詳細な専門書としてではなく、厖大なテーマを手際よくまとめた概括的な一般啓蒙書としてその存在価値をもつといえよう。

（松本三郎）

Immanuel Wallerstein,
Africa: The Politics of Unity: An Analysis of a Contemporary Social Movement
New York, Random House, 1967, xi＋274 pp.

イマニュエル・ウォーラースタイン著

『アフリカ・統一の政治
——現代社会運動の分析』

一、

第二次世界大戦後のアフリカにおける大変動を分析し、論述しようとするなら、だれしもパン・アフリカニズムのイデオロギーと運動に言及しないわけにいかないであろう。論者によつてその評価に違いこそあれ、パン・アフリカニズムが戦後のアフリカ地域の動向